

## 薩摩藩の有職学：玉里文庫研究一

崎村，弘文  
鹿児島大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/10430>

---

出版情報：文献探究. 20, pp.63-73, 1987-09-26. 文献探究の会  
バージョン：  
権利関係：

# 薩摩藩の職学

## ——玉里文庫研究——

崎村弘文

近世中期以降、諸藩において、いわゆる武家故実の研究が盛行を見た。

それは、伊勢貞丈・塙保己一・屋代弘賢らの活躍によるところが大きく、内容的に国学・考証学等と密接な関係を持ちつつ発展したもののようである。残された関連の資料は、当時の武家の学問のうち、経綸の学以外の大要を知るに恰好のものとなっている。

本稿では、西国雄藩の一・薩摩藩におけるそうした研究の実態を明らかにすべく、残された資料——鹿児島大学附属図書館玉里文庫所蔵の——の分析を行なつてみたいと思う。

### 一、玉里文庫所蔵の有職故実資料・概要

玉里文庫は、幕末の薩摩藩主島津忠義（茂久）の父・久光関連の文庫で、既に目録が刊行されている注<sup>1</sup>。

同目錄一七三六番—一九四二番の二〇七点（四八六冊一六卷）が有職故実関連の資料で、うち、一七三六番—一七八八番の五三点（二八八冊）はへ安齋隨筆と銘打たれた杉箱二箱（へ乾へ坤へ）に入れられ、余の一五四点（一九八冊一六卷）はへ伊勢氏書類と銘打たれた塗箱二箱（へ温故へ知新へ）に入れられている。いずれも、安齋・伊勢貞丈を初めとする伊勢家の人々との交渉を通じて得られたと見られる写本であるが、へ安齋隨筆へ五三点については、識語等がほとんど無く、それによって何人の書字に成るものかを明

らかにすることはできない。一方、へ伊勢氏書類へ一五四点の大部分は来歴が明らかで、薩摩藩士有馬純應およびその子らしい有馬純員の手になるものと見られる注<sup>2</sup>。

有馬純應・同純員は、『本藩人物誌』『西藩人物傳』等の薩摩藩士略伝集にも名の見えない無名の士であるが、江戸の伊勢氏嫡流・薩摩の同庶流と相当密接な交渉を持っていたらしく、慶応元年には純員がへ藩主茂久、久光父子臨席のもと鹿児島城の丸で古式にのつとり挙行された軍礼之式へへ惣差引を勤めたという注<sup>3</sup>。鹿児島大学法文学部教授五味克夫氏（日本史）によれば、へ鹿児島城下士で小番級の武士であろう注<sup>4</sup>。

彼らと久光との関わりは分明ではないが、久光自身、重富<sup>しげとみ</sup>の島津分家に在った頃からかなりの熱意を持つて研究を進めていたらしいことが、やはり玉里文庫所蔵の久光自筆本若干から窺えるので、或るいはその頃から交渉が有ったのではないかとも思われる。その後、久光は、へ國父として宗家に迎えられ、藩政を補佐する傍ら、右に見る如き関わりを持っていたようであり、さらに、明治に入つて中央より帰藩・西南戦争を経て以後は、とりわけ熱心に研究に当り、彼らの蔵書を提出させて句読・注解等のへ校正を行なつたようである。

今日見るへ伊勢氏書類が、純應・純員筆の本文と久光筆の朱・青のへ校正とから成つてゐるのは、そうした事情によるものと思われる。なお、久光のへ校正は、へ安齋隨筆中の各書にも及ん

ている。

ところで、それら資料のうちわけはと云うに、

△安齋隨筆▽

△乾▽箱三六点は、いわゆる故実関係のものらしく、貞丈の代表的著作と武具弓馬に関するものが多い。例えば、

『安齋隨筆』一五冊

『安齋隨筆補遺』二冊

『安齋類稿』六三冊（『安齋小説』『安齋叢書』の記事を類別、

配列し直したもの注）

『安齋隨筆分目・安齋類稿分目』合装一冊（右の『隨筆』と『

類稿』との目録）

『安齋書目』（貞丈の著述目録。藤原（本多）忠憲輯録本を源宗

悟（伊勢貞類）が写したものの純員転写本）

このほか、『火打袋』から『小車錦』『尺八笛』『二上峯』『武藏

鐘』『位袍』『まくなき注』『袖籠訓』に至る一連のものおよび

『洗革』は、われわれ国語学・国文学・学芸史等の研究者にとつて

は、故実書というよりも、むしろ興味深い内容の隨筆といった方が

適当なものであるが、薩摩藩の有職故実研究者にとつても、同様で

あったらしい。詳しくは後述するが、△伊勢氏書類▽中に、『俗語

字訓』『安齋隨筆抜粹』『安齋隨筆抄』といったそれらからの抄出

改編によって作成されたと思われる諸書が有り、内容の大部分が古

典の語文に関するものであることは、その一証である。

それら「隨筆」類と抄記書については、近々に注解を加えて提

示することとしたい。

△坤▽箱一七点は、いわゆる礼法関係のもののように、『増礼法

式』『進退記』といった書名が目につく。犬追物に関する四点一

冊・屋代弘賢『古今事覺稿』のうち器財部馬具鐘三の一冊のみ、

隨筆』日影のかつら』四冊等が含まれているのは、興味深い。

△伊勢氏書類▽

△温故▽箱六七点は、表紙貼り札により△温上▽六點・△温中▽

三八點・△温下▽二三點に分けられており、△上▽は比較的大部

で総合的なもの、△中▽△下▽は小部で個別的なもの（後者に

古伝多く、前者に稀）、という構成を取っているようである。

うち、次のものについては、同箱内または知新箱内に同一書が見

出たされ、その識語等から、純應・純員らが異本の収集にも努力を

払っていたことが窺える。

『武雜記』温上・知上・知に各一点

『婚禮問答』温中・知新箱貼り札無しに各一点

『烏帽子折問答』温中に二点

『酌并記』温中・知中に各一点

『五六掛鐘考』温中・知新箱貼り札無しに各一点

今川了俊大雙紙』温下に二点（一点の外題『大双帔今川異本』

）

△知新▽箱八七点は、表紙貼り札により△知上▽二六點・△知中

▽二七點・△知下▽三點・△知▽五點・△六番▽一点・札無し二五

點に分けられる。札無きもののいくつかは、或るいは札の脱落によ

ってそうなったものか。△上▽△下▽に武具弓馬に関するもの多く、△

中▽△上▽に礼法関係のものが多い。△下▽△六番▽は、彩色

図の卷子・冊子である。

次のものについては、同箱内に同一書が見出たされる。

『進退記口傳抄』知上・札無しに各一点

『法量物』知上に二点

『諸家參會記』知上・知中に各一点

『椿古目錄』知中に二点

なお、両箱を通じて、表紙にハ類稿巻：ニハの如く書したものの（計一八点）が認められ、ハ知新ノ箱にはハ安齋類稿抜書ノと書したのも二点見出だされる。そこに云うハ類稿ノハ安齋類稿ノは、ともに、前記ハ安齋隨筆ノ中の六三冊を指すと考ふる以外無さやうであるから、そのことは、即ち、ハ安齋隨筆ノとハ伊勢氏書類ノとが全く無関係に集成されたものではなく、前者の類纂が後者の参考・充実に寄与するといった密接な関係をもつて成立していることを物語るのであらう。

また、ハ知新ノ箱彩色巻中には、純員転写の次の二点がある。

『日新公御寄進御籠之圖』

『安藝守琉球征伐之節寄進甲之圖』

前者は、薩摩半島中郡・伊作のハ大汝ハ幡官ノに有った島津忠良（日新公）寄進の籠の図、後者は、ハ國分ハ幡社ノ蔵の樺山安芸守（久守カ）寄進の甲の図、であり、原本は薩摩藩士の手に成るものようである。即ち、それらは、既に伊勢氏流の有職故実研究から一歩踏み出して自らの周囲に有る実物に当たろうとする姿勢の現われていたことを示すものであらう。

薩摩藩の有職学に関しては、ハ幕末の武家故実の双壁ノに数えられる栗原信充を招聘したことが知られているが、その素地は、右に見える如く近世中期以来着実に形成されており、開花の時期を迎えていたことが、玉里文庫資料より窺い知られるのである。

## 二、資料の紹介と分析・若干

次に、薩摩有職学の水準と傾向とをより具体的に窺い得る資料若干について、述べておきたいと思ふ。

①『安齋隨筆抄』（知中）

②『安齋隨筆抜粹』（知上）

③『俗語字訓』（温下）

いずれも、ハ伊勢氏書類ノ中の大本で、内容的に重なる箇所がある。①は上下二冊・識語無し。②③は一冊で次のような識語を持つが、或るいは①が最も早く成立したもののか（後述）。

④「右一巻有馬純應七歳採筆於棲霞亭」

亭聽下于時天保八年酉春三月

也（印）

異本ヲ以テ校合ス時ニ明治十四年十二月也

玩古道人記

※初三行は純應の筆（久光筆の句読が加えられている）。印の上

×有り。末二行は、玩古道人・久光の朱筆。

⑤「天保十四癸卯歲四月十二日行年七十九日藤原朝臣純應寫」

明治十四年十二月校正了

※初行は純應の筆（ママの部分に、次行と同筆らしき筆でハ歳改

と有り）。次行は、久光の朱筆。

天保の頃に純應が貞丈の「隨筆」類より抄出・類纂しておいた本文を、明治になって久光が通読、句読を加えるとともに、本文各項目の出典を明らかにし補訂を行なった事実が、右の識語と資料各々の全体的様相とから窺える。そのことをやや詳しく見るために、各書の内容を③を主軸として比較対照してみると、次頁以下の表に示す結果が得られる。

各書の項目数は、① 432（上 247・下 185）・② 257・③ 213であり、①②には目録が付され目録・本文の各項に番号が付されている。また、各書とも、目録または本文に出典が書き込まれている。――表では番号（洋数字）・項目名・出典の順に示すが、下段の場合、出典以外は筆者が上中段のそれに倣って採録したものを示す。

40 俗語ニモワゾト云願ノ詞・ク	39 俗語ニアレカシナレカシナドノ願ノ詞・ク	38 俗語ニモノイフベキ初ニイデト云・ク	37 俗語ニモノイフベキ初ニアノト云出ス・ク	36 俗語ニドウシテト云・ク	35 俗語ニカリニモ又カリソメニモト云・ク	34 俗語ニ鳥獸ヲド云・ク	33 俗語ニツラト云・ク	32 俗語ニ是ナドアレナド云・ク	31 俗語ニサテト云・ク	30 俗語ニ何ノカノト云ニ及バズト云・ク	29 俗語ニモハヤト云・ク	28 俗語ニイツソノ夏ニト云・ク	27 俗語ニ千ト云・ク	26 俗語丁度・ク	25 俗語結句・ク	24 俗語折角・ク	23 俗語也波利・ク	22 俗語ノ苦・隨筆一二
------------------	------------------------	----------------------	------------------------	----------------	-----------------------	---------------	--------------	------------------	--------------	----------------------	---------------	------------------	-------------	-----------	-----------	-----------	------------	--------------

安齋隨筆抄

安齋隨筆抜粹

19 俗語ニドウゾ・ク	18 俗語ニアレカシナレカシナド・ク	17 俗語ニモノイフベキ初ニイデト云・ク	16 俗語ニモノイフベキ初ニアノ・ク	15 俗語ニドウシテト云・ク	14 俗語ニカリニモ又カリソメニモト云・ク	13 俗語ニ鳥獸スラ・ク	12 俗語ニツラト云・ク	11 俗語ニ是ナドアレナド云・ク	10 俗語ニサテト云・ク	9 俗語ニ何ノカノト云フニ及バズ・ク	8 俗語ニモハヤト云・ク	7 俗語ニイツソノ夏ニト云・ク	6 俗語千ト云・ク	5 俗語丁度・ク	4 俗語結句・ク	3 俗語折角・ク	2 俗語也波利・ク	1 俗語ノ苦・隨筆一二
-------------	--------------------	----------------------	--------------------	----------------	-----------------------	--------------	--------------	------------------	--------------	--------------------	--------------	-----------------	-----------	----------	----------	----------	-----------	-------------

俗語字訓

41 俗語ニ何トシタキカトシタキト云・ク	42 俗語ニモウシキハレシキナド云・ク	43 俗語ニ食テシマツタ捨テシマツタナド云・ク	44 俗語ニアバレルト云字・ク	45 俗語ニサスガニト云字・ク	46 俗語ニヨモヤト云・ク	47 俗語ニトカク又トニカクニトモカクモナド云・ク	(俗語ニカ子テト云・ク)	48 俗語ニソリヤト云・ク	49 俗語ニイカヒセワ又イカヒコト云・ク	50 俗語ニコマルト云・ク	51 俗語ニセツナイト云・ク	52 俗語ニドウヤラト云・ク	53 俗語ニサヤウデゴザルト云・ク	54 俗語ニワリナシト云・ク	55 挨拶・ク	56 俗語ニアヒシラフト云・ク
----------------------	---------------------	-------------------------	-----------------	-----------------	---------------	---------------------------	--------------	---------------	----------------------	---------------	----------------	----------------	-------------------	----------------	---------	-----------------

24 挨拶・隨筆一二

20 俗語ニ何トシタキカトシタキト云・ク	21 俗語ニモウシキハレシキナド云・ク	22 俗語ニ食テシマツタ捨テシマツタナド云・ク	23 俗語ニアバレルト云・ク	24 俗語ニサスガニト云・ク	25 俗語ニヨモヤト云・ク	26 俗語ニトカク又トニカクニトモカクモナド云・ク	27 俗語ニカ子テト云・ク	28 俗語ニソリヤト云・ク	29 俗語ニイカヒセワ又イカヒコト云・ク	30 俗語ニコマルト云・ク	31 俗語ニセツナイト云・ク	32 俗語ニドウヤラト云・ク	33 俗語ニサヤウデゴザルト云・ク	34 俗語ニワリナシト云・ク	35 挨拶・ク	36 俗語ニアヒシラフト云・ク
----------------------	---------------------	-------------------------	----------------	----------------	---------------	---------------------------	---------------	---------------	----------------------	---------------	----------------	----------------	-------------------	----------------	---------	-----------------

57	俗語ニマシテト云・ク	37	俗語ニマシテ・ク
58	俗語ニシレモノト云・ク	38	俗語ニシレモノ・ク
59	俗語ニグサノ又ゴト云・ク	39	俗語ニグサノ・ク
60	俗語ニメツタトモヤタラトモ云・ク	40	俗語ニメツタトモヤタラ共・ク
61	俗語ニウチナガメウチナゲト云・ク	41	俗語ニウチナガメウチナゲト云・ク
221	ソコハカトナクト云	42	ソコハカトナクト云
222	カヒナキト云詞・ク	43	カヒナキト云詞・ク
223	カタミト云ニツアリ・ク	44	および・ク
224	アタラシキト云詞ニツアリ	45	ミヤゲ・ク
225	ウルサキト云詞・ク	46	よみづと・ク
62	ヤノ字カノ字助語・ク	47	相撲訓・ク
172	詞ノ伸縮・ク	48	カシコシト云詞・ク
173	テニハノ畧・ク	49	カタミ・ク
68	大サ長サト云詞・ニ上峯一上	50	アタラシキ・ク
174	マヒト云詞・ク	51	古物語ノ詞・ク
95	粽ノ訓・ク	52	ウルサキト云詞ニウルセキト云詞・ク
		53	ヤノ字カノ字・ク
		54	詞ノ伸縮・ク
		55	テニハノ畧・ク
		56	大サ長サト云詞・ニ上峯一ノ上
		57	マヒト云詞・ク
		58	粽ノ訓・ク
		175	四方字訓・ク
		97	ヨミクセ・ク
		177	セメテト云詞・ク
		176	ハフルト云詞・ク
		178	ニコノ、シキト云詞・クニ上
		179	キギレルト云詞・ク
		180	イトノト云詞・ク
		181	スハト云詞・ク
		182	マタキト云詞・ク
		184	道ガユカヌト云詞・ク
		185	アエカト云詞・ク
		186	アツジレト云詞・ク
		187	サゾト云詞・ク
		188	大カタト云詞・ク
		59	無地・ク
		60	無詮所詮・ク
		61	四方字訓・ク
		62	タチト云詞・ク
		63	貴字ムナト訓・ク一ノ下
		64	ヤンヤアト云詞・ク
		65	サシテト云詞・ク
		66	カケテト云詞・ク
		67	ナマジヒト云詞・ク
		68	ナマナカト云詞・ク
		69	出擧・ク
		70	ヨミクセ・ク
		71	セメテト云詞・ク
		72	ハフルト云詞・ク
		73	ニコノ、シキト云詞・クニノ上
		74	キギレルト云詞・ク
		75	イトノト云詞・ク
		76	スハト云詞・ク
		77	マタキト云詞・ク
		78	道ガユカヌト云詞・ク
		79	アエカト云詞・ク
		80	アツジレト云詞・ク
		81	サゾト云詞・ク
		82	大カタト云詞・ク

189	テト云詞・ク
205	オコト云詞・ク
190	ナゼト云詞・ク
191	シクシルト云詞・ク
192	コジレト云詞・ク
193	一ハシラニハシラト云詞・ク
194	罵詞ニメト云・クニ
195	サバレト云詞・ク
197	サガナシト云詞・ク
206	寶ノ字訓・ク
198	ツトメテト云詞ニ品
199	人ヲフト、云詞・ク
200	人ヲテト云詞・ク
201	マ一ツ。モ一ツト云詞
202	キリト云詞・ク

83	テト云詞・ク
84	オコト云詞・ク
85	ナゼト云詞・ク
86	シクシルト云詞・ク
87	コジレト云詞・ク
88	一ハシラニハシラト云詞・ク
89	出納・クニノ下
90	罵詞・ク
91	サバレト云詞・ク
92	サガナシト云詞・ク
93	寶ノ字訓・ク
94	ツトメテト云詞ニ品
95	人ヲフト、云詞・ク
96	人ヲテト云詞・ク
97	シナカトリ・ク
98	マ一ツ。モ一ツト云詞
99	キリト云詞・ク
100	米ヲシ子共ヨ子共・ク
101	ハナナナ状・ク
102	權ノ字音・ク
103	ワザト、日陰ノ夏一ノ上
104	ムツカシ・ク

231	ナマメカシト云詞・日陰ノ夏一ノ下
232	アサマシキト云詞・ク
233	ナシト云詞・ク
234	イト、云又イチト云詞・ク
235	クルト云助語・クニ上
236	シムト云助語・ク
237	ムルト云助語・ク
238	キルト云助語・ク
239	ナフト云助語・ク
103	キミノ称・ク
240	ウタツカハシキト云詞・ク
241	俗語用字・ク

105	纒又僅ノ訓・ク
106	まくほしと云詞・ク
107	宣ノ字ノ訓・ク一ノ下
108	日下部・ク
109	ソバヘルト云詞・ク
110	ナマメカシト云詞・ク
111	アサマシキト云詞・ク
112	ナシト云詞・ク
113	イト、云又イチト云詞・ク
114	ウタテト云詞・ク
115	カツト云詞・ク
116	ハタト云詞・ク
117	キルト云詞・ク
118	ムタ事・クニノ上
119	クルト云助語・ク
120	シムト云助語・ク
121	ムルト云助語・ク
122	キルト云助語・ク
123	ナフト云助語・ク
124	巴ノ字訓・ク
125	キミノ称・ク
126	ウタツカハシキト云詞・ク
127	俗語用字・ク

242	シヤニカマヘルト云 俗語・ク	243	ナカノト云詞・ク 下ニ	54	ラウタキ・位袍一上	128	シヤニカマヘルト云 俗語・ク
216	曉字訓・ク	213	黒子訓・位袍一下	60	さといふ詞・ク一下	129	副ノ字ノ音・クニノ 下
214	ウルムト云字・ク	215	額字ノ訓・ク	61	シユをストといふ詞・ク	130	なんと云詞・ク
85	安堵・ク	62	ケンをクエンといふ 詞・ク	63	ムとミ相通・ク	131	ナカノト云詞・ク
83	難字・クニ上	64	ムとニとの用・ク	132	ラウタキラウタゲニ ト云詞・位袍一ノ上	133	オドケ・ク一ノ下
149	安堵・ク	140	ムトミ相通・ク	134	鍬ノ字ノ訓・ク	135	ツガリ・ク
148	曉字訓・ク	141	ムトニトノ用・ク	136	サト云詞・ク	137	兒ノ字訓・ク
147	難字・クニノ上	142	鞆ノ字・ク	138	シユヲスト云詞・ク	139	ケンヲクエント云詞 ・ク
146	キンチャウシテ誓 ・ク	143	黒子訓・ク	143	シユヲスト云詞・ク	144	ウルムト云字・ク
145	額字ノ訓・ク	144	ウルムト云字・ク	145	額字ノ訓・ク	146	キンチャウシテ誓 ・ク

227	ステニト云詞・ク	226	モハヤト云詞・ク	169	朝タノ語・武藏録ニ上
169	中古以来書・ク	171	ツマト云詞・ク	170	計會・ク
172	袖袂訓・ク	173	中古以来書・ク	168	つとめたと云詞・ク
174	モハヤト云詞・ク	174	モハヤト云詞・ク	167	コマルト云詞・ク
175	ステニト云詞・ク	175	ステニト云詞・ク	166	養育字古訓・ク

150	尺字ノ訓・同ニノ下	153	鳥佳字・ク	163	彼は・ク
151	シヨサイ・武藏録一	154	無乃字寧ノ字・ク	164	堅塊・ク
152	シノブト云詞三品	155	蓋字・ク	165	但字・ク
156	オモシヤル・ク	157	チヨボイチ・ク	166	養育字古訓・ク
158	カキヒタシ・ク	159	字音與和訓相似・ク	167	コマルト云詞・ク
160	字音與和訓相同・ク	161	あらしと云詞・ク	168	つとめたと云詞・ク
162	勉強・クニノ上	162	勉強・クニノ上	169	朝タノ語・ク
163	彼は・ク	163	彼は・ク	170	計會・ク
164	堅塊・ク	164	堅塊・ク	171	ツマト云詞・ク
165	但字・ク	165	但字・ク	172	袖袂訓・ク
166	養育字古訓・ク	166	養育字古訓・ク	173	中古以来書・ク
167	コマルト云詞・ク	167	コマルト云詞・ク	174	モハヤト云詞・ク
168	つとめたと云詞・ク	168	つとめたと云詞・ク	175	ステニト云詞・ク
169	朝タノ語・ク	169	朝タノ語・ク		



228 スコブルト云詞・ク  
 227 トテモノ事ニト云訓  
 下 125 吉ノ字訓・クニノ下  
 203 エ、シキト云詞・洗  
 革一ノ下  
 204 サウゾキト云詞・ク  
 84 散米・ク  
 下 88 踵字訓・マクナキニ

181 子ガルといふ字・マクナキテ下

176 スコブルト云詞・ク  
 177 トテモノ事ニト云訓  
 178 タテマツルト云詞ニ  
 ツ・クニノ下  
 179 吉ノ字訓・ク  
 180 ハカナシト云詞・洗  
 革一ノ下  
 181 エ、シキト云フ詞  
 182 サウゾキテト云フ詞  
 183 コタミ・ク  
 184 ウチマキ・ク  
 185 ヘイマン・ク  
 186 ソバロト云詞・マク  
 ナキ一ノ上  
 187 マタウド・ク一ノ下  
 188 サウト云俗語・ク  
 189 トカクト云詞・クニ  
 ノ上  
 190 踵字訓・ク  
 191 カバギ・ク  
 192 ムサト云俗語・クニ  
 ノ下  
 193 カブレルト云字・ク  
 194 子ダルト云字・ク

218 サレバ並ニサルト云  
 詞・ク三ノ下  
 219 ヒツタクルト云詞・ク  
 220 ハシタナキト云詞・  
 ク三ノ下  
 212 帥ノ字音訓・ク  
 211 タバカルト云詞・隨  
 筆十

184 ツチ通音・ク  
 186 バカリといふ詞・ク  
 三ノ上  
 188 サシモ並ニサモといふ  
 詞・ク  
 189 サレハ並ニサルといふ  
 詞・ク  
 190 浅マシ並ニ浅ハカとい  
 ふ詞・ク

195 ツチ通音・ク  
 196 バカリト云詞・ク三  
 ノ上  
 197 サシモ並ニサモト云  
 詞・ク  
 198 サレバ並ニサルト云  
 詞・ク  
 199 浅マシト云詞並ニ浅  
 ハカト云詞・ク  
 200 ヒツタクルト云詞・ク  
 201 ハシタナキト云詞・  
 ク三ノ下  
 202 コソバユシト云字・  
 隨筆三  
 204 俗語キツトスル・ク  
 四  
 205 埒ノ字・ク  
 206 馬埒・ク  
 207 大臣ヲオトトヨフ・ク  
 208 タバカルト云詞・ク  
 十  
 209 帥ノ字音訓・ク  
 210 俗語ニ幾ト何トヲ混  
 雜・クハ  
 211 嚙ノ字・ク九  
 212 古ヨリカタツカヒノ  
 言多シ  
 213 尾ノニ字ノ訓・クニ

これを見ると、まず

(1) ③は、①②のいずれにも同一項目を見出だせるが、特に前者(それも上冊)との間でそれが著しい。

と云えようである。

同一項目を見出だせるもの	132項 (62.0%)
①の上冊に	112項 (52.6%)
〃下冊に	4項 (1.9%)
②に	16項 (7.5%)
同一項目を見出だせないもの	81項 (38.0%)

この合致率の高さは、偶然によるものとは考え難い。その背景に(1)いずれかがいずれかを引いた、(2)同一人の同一書類よりの抄記で合致するところが多かった、といったような事情が有ったのでは、と考えられるところである。

この場合、(1)は、①内での項目のまとまり方から見て成立しやうでない。(2)については、次の点が解決されれば十分成り立ち得ると考えられる。即ち、

①は貞丈著作よりの純應の抄書であるが、③は、『玉里文庫目録』、『圖書總目録』等に貞丈の著と有って、純應の抄ではないかの如くである。

これについては、他に③の伝本が無く、かつ、③中に、多賀常政が貞丈没後に編纂したとされる『二上峯』がその巻序・項目配列通りに引用されていること等を考え合わせると、かなり疑問となしなればならない。むしろ、①②と同様、純應が熱意を持って「随筆」類より抄出した編著と見なすのが妥当であると思われる。

①③の各書は、いずれも、貞丈の研究成果を自家筆籠中のものにせんとする有馬純應の研鑽の跡を示すもの、ということにな

る。①の成立年代は明瞭でないが、その内容が雑多で②③ほど精選されていないところを見ると、三書中最も早いのではないかと思われる。

次に、  
(2) ①②において同一項目を見出だし得るのは、③の、合点を付されている項目である。  
とも云えようである。

同一項目アリ・合点アリ	127項
〃	5項
同一項目ナシ・合点ナシ	5項
〃	76項
同一項目ナシ・合点ナシ	76項

4.7%  
95.3%

若干の例外は有るものの、ほぼそのように見てさしつかえ無さやうである。その背景は、合点の付された事情に求められる。即ち、合点は、明治になって、久光が三書を通読後、重出項目(同一項目)を検査するために付したものである。

久光は、三書と「随筆」類とを熱心に読んだやうで、次の諸点にその形跡が認められる。  
(1) ②の目録・本文の各項に、久光のものと見られる筆で注<sup>7</sup>番号が付されている。

(2) ①③の目録または本文に、明らかにな久光筆で出典が記されている。  
(3) の合点付き項目に対応する「随筆」類の項目に、やはり久光筆の合点が付されている。

(4) ③の合点の中には、一度付された後、見せ消去にされた例も有り、右の10項47%の例も或るいは打ち誤りによるものかと思われるが、なお検討を要する。

ところて、明治にまで及んだ薩摩藩の有職字は、久光によりどの程度の水準にまで達していたであろうか。次に、それを知るいくつかの手がかりに久光の加えた補訂の例を見ておきたいと思う。

○『安齋隨筆抄』

34「一 俗語ニ鳥獸ヲラナド、云フ、スラハ尚ノ字也、」に頭注「スラハ俗語ニハアルベカラズ」

38「一 俗語ニ、モノイフベキ初ニ、イデト云フハ、蓋ノ字也、又オホカトト云フモ、蓋ノ字也、」に頭注「イデハ俗語ニハアルベカラズ古今集ニアル詞ナリイデ我ヲ人ナナガメソ云」

65「一 二上峯、嶺共日向國、曰杵郡ニ、高千穂ノ峯アリ、一名二上峯ト云、(中略) 同國諸縣郡ニ、霧島峯アリ、山上峯ニツニ分レタリ、故ニ此峯ニツ有ルト、二上峯ノ名ト紛レテ、霧島峯ト、二上峯ト、同所也ト云説アリ、誤也、(中略) 此事ヲ、貞丈歌ニ、霧島ノ、ニ峯ナルヲ、高千穂ノ、二上嶽ニ、マカヘザラナム、」に頭注・傍注「此高千穂ノ説大ナル僻説ナリ削ルヘシ」

「三國名勝圖會霧島ノ條正説アリ就テ見ルベシ」  
「オノレヨル 霧島ノ、高千穂峯ヲ、曰杵ナル、低キ智保根ニ、マカヘザラナム、」

○『安齋隨筆抄』

ヤ「一 國初、叢生惚布衛門、並びに彼門人の書たる文に、東暎密の御代をさして、國初といへるハ、大誤也、異國にて、他國の人、天子を殺しなどして、王位を奪ひ取り、新に國号を建たる、其天子の時代の事を、其子孫の代より指テ、國初といふ也、(中略) 今の儒者にハ、物しらぬ愚人多し、万巻の書を讀、文章に達したりとも、異國のことはかり知りて、吾國の事を知らずバ、吾國にハ益す、なまき人也、是を物しらすの愚人に、近し是を名付テ、腐儒者といふ、(中略) 唐々とくちハきけども、愚者くとくされた儒者ハ、唐人の屎、」

○『俗語字訓』

130「一 なんと云詞、何がしといふ人なん有ける、又何し侍るになん、の類ひ、たゞ助語にて、何の意義なし、宣命の詞ニハ、奈毛とあり、なんと云に同じ、」に傍注「なん有ける、ナントイヘバ、ルト結フ格アレバ、意義ナシトハ云ベカラズ、是ハテニハノゾノ字ニ似タル詞ナリ、」

170「一 計會、古キ俗語也、事ノ彼ト是ト云ヒ合セタル如ク、一度ニ出合ヒ来ルヲ云、」に傍注「俗語ニハアラジ、今日不知誰計會、春風春水一時来、トイヘル詩句ヨリ出タル歟、」

209「一 帥ノ字音訓、帥ノ字、スイノ音ニテハ、將帥元帥ナド、連子テ、大将ノ事也、又ソツノ音ニテハ、卒ノ字ト同シ義ニテ、ヒキ井ルトヨミテ、引卒スル也、サレバ太宰、帥ハ、太宰府ノ大将ナル故、太宰ノス、トコソ唱テ云ベケレ、太宰ノソツト唱へ来レルハ誤リナリト、清油在、瀨ガ云シゲニコトワリ也、足ノ字音ソ、クトヨメバ、アシ也、音スウトヨメバ、タル也、物ノタラヌヲバ、ブ、スウト云フベキ也、不ソク、ト云ハ誤リ也、出ト云字、此方ヨリ出ルハ、音ス、也、彼方ヨリ出ルハ、音シ、ユツ也、サレバ、出奔ハ、ス、ホントヨムベシ、此方ヨリ出テ走ル也、彼方ヨリ走テ来ルハ、シ、ユツ、ホン、也、如此ノ類、イクラモ有ベシ、心ヲ付クベキ事ナリ、」

「」に頭注「不足ヲフスウ也トハイカ、スソクナルベシ、」  
「余按ズルニ、出ノ字、イヅルト云トキハ、音シ、ユツ也、イ、ダ、スト云トキハ、音ス、也、正韻ニ、凡物自出、則入声、ナリ、非自出而出之、則去声、ナリ、然レバ、出奔ハ自出ナレバ、シ、ユツ、ホン、也、ス、井、ホン、ニハアラズ、」

久光は、詩歌をよくし、『詞の玉の緒』、『眞淵判荷田在満家歌合』等の国学関係書や大野廣城編『証歌類葉』四五巻一二冊等を書写したほどの人であり、また一方、幕末維新の激動の中で徳川家の姻戚・公武合体論の政治家として重きをなした人でもあった注8。右の片々たる注記の中にもその面目は躍如としていよう。

時代は、ようやく国学から国語学・国文学を生み出しつつあったが、久光は一人辺陲の地に在って、それと相補う研究に没頭して

たわけである。その学風は実証を重んずるもので、既に、貞丈流の故実の限界であるへ机上の仮説✓的性格を鋭く指摘してもいる。9. この後、彼はさらに研究を続け、明治二〇年一月鹿見島市玉里邸において世を去った。伝えられた資料は歴大であるが、本稿がその一端を明らかにするものとなれば幸いである。

【注】

1 『玉里文庫目録』昭和四十一年一月九六六一〇月三〇日鹿見島大学附属図書館発行。

2 『玉里文庫目録』一四〇頁〜一五〇頁ならびに五味克夫「故実家としての薩摩伊勢家と伊勢貞昌―関係資料の紹介―」(「鹿大史学」三四)五二頁、参照。

3 注2論文五四頁参照(傍点筆者)。

4 注2論文五三頁〜五四頁、参照。

5 一部に、『小説』、『叢書』以外の記事らしいものが混じっている。

6 『玉里文庫目録』に八満々なき✓、『國書總目録』に八万久前志✓と有るが、いずれも誤り。「まくなき」は、今日云うところの目くばせのことで、『まくなき』開巻冒頭にその旨述べられている。

7 久光筆であることは、次のことから判断される。

『抜粹』目録四二〜五九に、番号の打ち誤り↓訂正有り。誤りの原因は、目録が通例上下二段書き・一部三段書き(中段に、純應が書き落としを補入)であるのに、後者の事に気付かず、中段を飛ばして番号を打つて行ったことに在る。目録の筆者純應が番号を打ったのであれば、そうした誤りの生ずることはかなり考え難い。また、訂正の太字には、久光筆の特徴が見られる。

『抄』下にも、同様の原因による打ち誤り↓訂正が見られる。8 史上著名な生麦事件・薩英戦争・蛤御門の変は、いずれもこの人の意志によつて決定的なものとなつた。

9 例えば、『抄』65に対応する『上峯』の項目には、「此條大ニ非ナリ其地ヲ見ズシテ牽強附會スル博識ノ病ナルベシ」との頭注が見られる。

なお、未筆ながら、資料の閲覧ほかに便宜を計られた鹿見島大学附属図書館の各位・御教示を賜わつた鹿見島大学文学部教授五味克夫氏に感謝申し上げます。

—鹿見島大学教養部助教授—